

おい図書館

No 48

六六回

浦安図書館訪問

三名の議員も参加

七月二十二日、毎年の恒例になりました浦安図書館見学に行ってきました。昨年同様、市議会議員をお誘いしたところ、三名の方に同行していただき、感想を寄せてくださいました。今回は、市長、助役、企画部、社会教育部にもお誘いを出しましたところ、日程が合わない旨のご丁寧なご返事をいただきました。

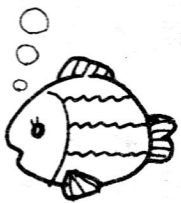
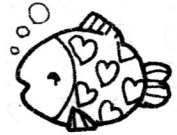
た。来年はぜひ、一緒にしたいと思います。

元橋スミ子

さん

「おい図書館」の会員の方々から何回も図書館見学のお誘いを受けながら時間が取れず実行出来ずに居りましたが、七月二十二日に、青木さん達と浦安図書館に行ってきました。

此の度の見学で私の想像が間違っていたと納得した次第です。濱世田館長さんの熱心な説明を聞きながら、専門職としての自信を窺い知る事が出来ました。行政視察と図書館も見学しましたが、納得出来る説明の出来る担



当者が東外と少いのです。施設がどんなに立派でも、蔵書が何万冊あることも、運営に携わる人達と利用する市民とにギャップが生じる事があれば実の持ちぐされというものです。浦安市は若い町とあり財政面でも恵まれており、図書館費用も我が市よりも良いようです。市民一人当たり六〇〇円〜七〇〇円負担をしてもらっているとも館長さん自らの説明もありました。人口の流出を防ぐために、促進を奨励し、高令になつたら郊外に移つていたが？それには私は反論いたしました。おそろくうっかりとした失言だったと思います。他

他市を訪問し、メインステーションから町を眺めた時、品格のある町づくり、品格のない町づくり、

説明が無くても肌で感じるもの
ご、町づくりには市民の参加が
是非必要なのです。

子ども達に多くさん本を誦ん
でもらつて、良い音楽を聞いて
もらつて心の財産をたくさんた
くさん貯わえられるような環境
づくりをするのが私達の大きな
責任でもあります。

松戸市に於いても図書館づく
りはしつかりと計画に組み込ま
れ、市長選での公約でもありま
す。用地の問題、財政問題と難
題はありますが、実現の途に共
に頑張らせていただきます。

「おい図書館」の方々の熱心な
活動状況を誌ませていただきま
して敬意と感謝を申し上げます。
又の機会に参加させて
下さい。ありがとう

ございました。

。。。

小沢 曉民

さん

図書館運営は、まさに館長に
よつて決まるんだということを
つくづく感じさせていただきま
した。今日の浦安図書館探訪とし
た。

五代目齋世田館

長の自信あふれ

た説明の裏づけ

はどこからきて

いるんだらうと

考えておりました。

たが、本人の専門職としてのラ

イイドもさることながら、やは

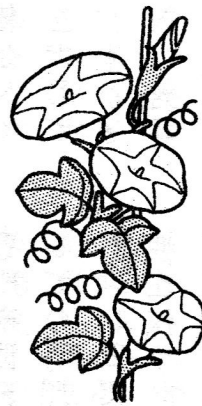
りバックアップしている行政長

の理解があればこそのことだと

私なりに解釈させていただきま

した。本市と今後取り組む新図

書館建設にあつては、まず市長



がどの程度、どっぷりこのこと
にのめり込むかにかかつている
ような気がします。箱モノは、
金があれば、いい設計士が担当
すればつくれますが、問題は理
念と文化に対する情熱のかけよ
うとあります。一生涯図書館と
運命を共にす

る専門家へキ

チガイともい

われるしをど

の位事前には確

保する考えが

あるか、又、

新図書館のたましいはどうする

か等々、これから解決していく

ことがたくさんあることを感じ

させていただいた視察とありま

した。



おい図書館

浦安図書館見学

私は、浦安市立図書館を見学するのは初めてだったのですが、公共図書館の中で浦安市が常に注目され続けてきている理由が、常世田館長の話と見学の中から感じられました。

それは、図書館運営が常に利用者の視点に注目しているということでした。

図書館が利用者を考えるのは当然ですが、こま

やかな注意を払わない限り、職員の間で利用者は固定化し、枠にはめたり、利用者におもねることになってしまいます。それを、意見箱の設置、利用者調査、市民の意識調査などによって、利用者が今、どの様な入っているのか、図書館になにを求めているのか、図書館運営に生かそうとしています。それが、館長の言葉の中に頻りに現れているところに、浦安市立図書館が「一時代の公共図書館の成功した姿」とはならず、継続的に成功している図書館であるのだと思いました。

そして浦安市立図書館が、この「利用者からの視点」を常に意識して持つていられるのは、

大多数の専門職員によって支えられているのだと感じました。それは資格を持った事務職、行政職ではなく、常に専門性を保つために自己研鑽を重ねる、専門集団を構成する一員としての専門職となくしてはならないと思いました。専門性を保つには長期的な雇用でなくてはならないからです。

やはり図書館と働く職員は専門職として、行政職とは別雇用で働いてもらうことが、市民の要求に充分応えられる公共サービスであると考えました。

(吉原 里絵)

夏休みになって早々の七月十二日、一度行ってみたいと思っていた浦安図書館に行くことができました。

浦安図書館は、今年の三月一日が開館十五周年です。「開館以来一年というスピードで日本と初めて市民一人の年間貸出冊数がニケタ(十一、四冊)を達成」へ広報(うらやますた)の号よりしてからずっと、全国のモデル的図書館として注目されているのは何故でしょう。

図書館に着いたのは、十時開館の十分前。入口には、もう三十人位の入達が待っています。どれどれ憧れの浦安図書館、どんな様子かと大きなガラスのドア越しに中を見てびっくり。

なんと広くて明るいことか！本の整理をしている職員の方のなんと大勢いらっしやることか！もうこの開館前の風景になる程。そうかと納得してしまいました。ここには、利用する側と、される側の思いをうまくかみ合わせるといふ当然にして難しいことが、きつとうまくいっているに違いないと。

地域ご毎月一回、ささやかなおはなし会をしている私は、ここ二年、来る子供も達の数が減ってきているのが気になります。それから、我が家から一番近い図書館の分館は、市民センターの三階です。階段を上るのがつらくなったらどうしようかと心配です。ですから、さまざまなお話の中で嬉しく思ったのは、本のおもしろさを子ども達に知

ってもらうための「学校ブックトーク」と、図書館に来られない人への「宅配」です。どういふ本をどのように揃えるかは、図書館の最も基本的な大切なことだと思えます。将世館長のお話では、子どもには語り継がれている良書がたくさん謙めるように。大人には、新旧取りまぜ多種多様な要望に答えられるようにとのことでした。詳しい説明と、隅々まで見学させていただきありがとうございました。うございませした。

松戸の現状を知りたくなりまして。(水口旺子)

